

印欧語学の問題点

風間, 喜代三

(出版者 / Publisher)

法政大学教養部

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

法政大学教養部紀要. 人文科学編 / 法政大学教養部紀要. 人文科学編

(巻 / Volume)

93

(開始ページ / Start Page)

1

(終了ページ / End Page)

24

(発行年 / Year)

1995-02

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00004594>

印欧語学の問題点

風 間 喜代三

現代の言語学は、F. de Saussure の「一般言語学講義」に始まるとされている。印欧語学の基礎は Junggrammatiker によって築かれたが、この学派に学んだ彼によって新しい発展への道がきり開かれた。それはいうまでもなく、彼が 21 歳の若さで発表した *Mémoire sur le système primitif des voyelles dans les langues indo-européennes* (Paris, 1879) である。この大きな、しかも大胆な仮説をふくむ研究は、Junggrammatiker の設立のきっかけになった Brugmann の鼻音ソナントの仮定の延長線上にあり、さらにさかのぼれば、それは古代インドのサンスクリット文典が示した i-e-ai, u-o-au に並行する r-ar-ār という母音交替の組織的なとらえ方に始まるといえよう。一例をあげれば、Gr.teino 「延ばす」、Aor.éteina <*etensa. Pf.mid.tétamai は、同じギリシア語の peiro 「貫く」、Aor.épeira <*epersa, Pf.mid.péparmai と母音交替の上で並行しているとみれば、teino <*tenyo の完了形 teta- の a は、pepar- <*pepr- と同じ弱階梯の *te-tŋ- に由来すると思われる。またこれと同じ語根に属する Skr.pres.tanóti, p.p.patá-, Lat.tendo, tentus の完了分詞形の語根部の母音も *tŋ-to と解釈されよう。これが Brugmann のいう鼻音のソナントの仮定である。Saussure はこれをさらに一歩進めて、つぎのような図式を考える (Recueil 所収 *Mémoire* p.137)。

Skr.ás-mi, ás-(s)i, ás-ti, s-más 「ある」

Gr.eī-mi, eī-s, eī-si, í-mes 「いく」; Gr.phā-mí, pháis, phā-tí, pha-més < phea-mi, phea-si, phea-ti, pha-mes 「いう」。ここから as-/s-, ei-/i- と phea-/pha- を並行して理解すれば、この長母音 ā < ea を構成する a という要素は、i (u, m, n, r, l) と同じ機能をもったソナントだろうと推定されよう。Saussure はこれを *coefficient sonantique* とよび、

長母音の a と o にふくまれるそれを二種 (A, O) 仮定した。これにどのような音値を予想していたかについては, “une espèce d’e muet, provenant de l’altération des phonèmes A et O” (Mém. p.167) と説明されている。ただ長母音 e の弱階梯については, a のそれと区別はないとして独立のソナントを設定しなかった。この点はまもなく修正されることになるが, このソナントの仮定による内的な祖語の再建によって, それまでの母音交替の理論構成は大きく改められた。例えば, サンスクリット文法の教える 7 類の *yunákti* 「結ぶ」, *bhinátti* 「裂く」と 9 類の *lunáti* 「切る」, *punáti* 「清める」が一つの型で理解できるようになった。これは, Saussure 以後に発展する一定の語根形式の設定にもつながるものである⁽⁴⁾。しかしこの *Mémoire* に展開された理論は, Saussure の死後まもなく解読されたヒッタイト語のもつ h の音との関係をめぐって新たな発展をみ, ここにいわゆる喉音 *laryngales* 問題が生まれてくる。この理論は今日でもなお論争的になるくらい, いわば印欧語学の古くて新しい問題である。その証拠に, 戦後に始めてアメリカの印欧語学者が 1959 年 5 月にテキサスに集まったとき, そのテーマは “Evidence for Laryngals” (ed. by W. Winter, The Hague 1965) であったし, また最近では, その時のメンバーでもあった W. Cowgill の追悼論文集としてまとめられた *Gedenkschrift* も, “Die Laryngalthorie und die Rekonstruktion des indogermanischen Laut-und Formensystems” (hrsg. von A. Bammesberger, Heidelberg 1988) と題され, 多くの研究がこの問題への関心の深さを示している。

それではなぜそのようにこの問題が紛糾してしまうのだろうか。それにはいくつかの原因があるように思われる。まず *Hitt.h* で表記される音が, Saussure の仮定したソナントに比定されるとしても, これは子音であってソナントではない。従ってこれらは二つの異質の音である。それを Saussure が整備した母音交替の組織のなかにそのまま収めることはできない。そのために 3 つの違った立場が考えられる。まずこの 2 つの関係をきりはなす立場である。その主な理由は, *Hitt.h* の分布が, 比較によって予想されるような位置にあらわれないことであろう。名詞, 動詞を通して, インドやギリシア語派にみられるような活発な母音交替は認められないし, これに伴う h の動きもない。Saussure が推定した長母音とその弱階梯に対して, ヒッタイト語が h をもって対応することは極めて少ない。*Hitt.pahs-mi* 「守る」と *Lat.pāscō*

「飼育する」に代表される一連の対応は、長母音に h のたつよい例だが、pahs- という語根部は固定的で、交替はうかがわれない⁽²⁾。Saussure が予想しなかった語頭の h- の対応を別にすると、確実な対応に基づく長母音の弱階梯の位置にたつ h を指摘することは容易ではない。そこにこれを孤立的に考えようとする見解の強い拠り所がある。

しかしこのように Hitt.h をこの言語のなかだけで考えて、他の印欧語との関係を切り捨てようとするには、一方で捨て難い対応があることも認めざるをえない。そこでこれを従来の対応のなかにできる限り組み込む際に、これを Saussure の仮定したソナントもろともに、すべて子音として扱おうとする立場が考えられる。この解釈それ自体には一貫した理論構成が期待される。しかしその代わりにそれまでに比較文法がソナントの母音化を予定してきた弱階梯を、全面的に新しく解釈しなおす必要にせまられてくる。例えば、Skr. pitár-, Gr. patér といった有名な対応にしても、この i, a といういわゆる schwa indogermanicum を、接尾辞的要素として別個に説明しなければならぬ。これはあまりにも従来の組織に抵触する。そこで第3の立場として残るのが、子音とソナントの折衷案しかない。その場合にヒットイト語の資料を重視するか、あるいは Saussure の仮定した線に留まるかによって、かなりの違いがでてくることになる。Saussure 以後の比較の研究者の多くは、前者の立場に傾いてきた。それが問題をいっそう複雑にした。

Saussure は長母音にふくまれる2つのソナントを仮定したが、これはまもなく3個に訂正された。すなわち、祖語の長母音 e, a, o のそれぞれに別個のソナントを予定しようとするものである。これは単純な仮定のようにみえるが、実際にはこれと組み合わされる e/o という交替する母音があるために、その結果を判定するのに面倒な問題がおこってくる。Saussure はこれとソナント A の結合を、Gr. phāmā 「噂」: phōné 「音」という例によって、eA > ā, oA > ō とし、またソナント O との結合を Gr. dídōmi 「与える」: dōron 「贈り物」という例によって、eO > ō, oO > ō とした。Saussure のいう A, O はその後の理論では H₂, H₃ と表記されるものであるが、とくに前者の oA, すなわち oH₂ については、異論がある。Saussure がなぜこの例として Gr. phōné をあげたかといえば、それはこの -né という接尾辞をもった形が語根部に o 階梯を持つと判断したからである。例えば、Gr. poiné 「償い」など。しかしそれはかならずしも一定したものではなく、ときには pherné 「持参

金」のように、e 階梯を示す形もある。これは Gr.gónu に対する Lat.genū 「膝」、Gr.poús, podós に対する Lat.pēs, pedis 「足」のような e/o のばらついた分布にも認められる。それでもなおこの o 階梯を本来のものとみなそうとすると、そこに類推の可能性がひそんでいる。というのは、多くの名詞形がもつ o 階梯が、ここにも及んだのではないかという可能性は常に否定できない。とすれば、ここで oA, つまり oH₂ の融合した結果は、長母音 o ではなくて a ではないかという推定も否定できなくなる。Saussure 自身もこの点に疑問を抱いていたことは、その Mémoire 145 頁以下の記述からもうかがわれるが、その後今日もなおこの母音の音色について意見がわかれている。その際に問題になるのは、完了形の形である。これが概して o 階梯をもつということは周知のことであるから、Gr.lanthánō 「知らぬ間にする」の pf.lélētha <*lelātha, あるいは Gr.pégnumi 「固める」の pf.pépēga <*pepāga の語根部の母音 a は、oH₂ のあらわれと判断できる。ところがこの場合にもまた類推の可能性を考慮しなければならない。なぜならば、この形をとりまく同じ語根に属する変化形の多くは、どれも長い ē < ā をもっているから、その影響を考慮すれば、この ā はそれらの類推によるもので、本来は oH₂ > ē であったという推定を否定することは難しくなる。

この結合について、同じような問題が H₂o- の判定にもあらわれてくる。この仮定、即ち母音ではじまるすべての形の語頭には H の音があったとする仮定は、ヒットイト語が解読されてまもなく Hitt.hastai: Gr.ostéon 「骨」、Hitt.haster: Gr.astér 「星」といった対応から導き出された結論であり、ごくわずかの対応に基づく拡大解釈である。もちろんこれによって、Benveniste の CVC- 語根理論のような祖語の理解が生まれたわけだから、この仮説にはそれなりの価値はあったといえよう。しかしここでも H_{1, 2, 3} と e/o との組み合わせが考慮されなければならないので、その確実な形を指摘することが求められてくる。そこでつぎのような対応をみると、再建形はかならずしも一様ではない。Hitt.havi- 「羊」: Skr.ávi-, Gr.oís, Lat.ovis, あるいは Hitt.hastai: Skr.ásthi, Gr.ostéon, Lat.os (gen.ossis) について、祖語に予定される形の語頭は H₂o- か、あるいは H₃e- の 2 つの可能性が考えられる。なぜならば、前者の o 階梯については、単純にこれが名詞形であるということを根拠に想定されよう。その場合ヒットイト語の h は H₂ であるという説に従うと、再建形は *H₂ovi- となる。しかしここでの o 階梯の要請は、それほど

拘束力をもたない。例えば, Skr.yákr̥t, Gr.hēpar, Lat.jecur「肝臓」のような孤立した対応をみると, e 階梯の可能性も否定できないからである。そこでここに *H₃evi-, H₃est(H)i- という再建が可能になる。この仮定から, 逆に Hitt.h と H₃との関係が考えられてくる。

このように恣意的な再建のいきつくところは, e/o の交替を認めながらも, 実際の再建にあたってはこれを無視して, 母音は e のみであったかのように理論構成をおこなうことになる。そのほうが形式的には明解な説明があたえられるからである。ここに Saussure に始まった喉音理論のいきづまりがあらわれてくる。

ここで語頭に仮定される H に関して, ギリシア語とアルメニア語にみられるいわゆる前置母音の問題にもふれておこう。Gr.ónoma: Arm.anun: Lat.nōmen「名前」; Gr.astér: Arm.astî: Lat.stella「星」にみられる前置母音を, スペイン語などにみられるそれと同じように, 単なる調音上のものとみなないで, その形本来のもつ *He- の弱階梯である H- の母音化のあらわれであるとすることは, ギリシア語がその母音に e, o, a を示すことと, その音色の違いをそれに後続する子音 (多くは r, そのほか r, l, m, n, w) の差に帰することができないところに起因している。その結果これを 3 個の H に当てることによって, この音色の違いが説明された。そこで例えば, Gr.odón, Arm.atamn: Skr.dánt-, Lat.dent-「歯」という対応において, なぜギリシアとアルメニアの 2 つの語派だけが H の弱階梯をもち, その他の語派はゼロ階梯を示すのか, まったく同じ接尾辞をもつ形にあらわれたこの階梯の差の説明はあたえられない。

またすべての母音で始まる語根の語頭に H- を仮定するという理論からみると, つぎのような矛盾が認められる。Hitt.hanti「に対して, 代わりに」: Gr.antí, Lat.ante という対応は Hitt.h- から祖語の H- を仮定させる有力な対応であるが, この場合には当然 *H₂enti が予想されよう。前置母音の例としても, ヒットイト語の加わる対応として, 先にあげた「星」がある。Hitt.haster(za)-: Gr.astér, Arm.astî, それに Skr. (pl.) tārás, st̥bh̥is, Lat.stella, Goth.stairno, Toch.B ściryē. この場合に, 前置母音は弱階梯に由来するという解釈によれば, H₂ster- が祖語に再建されよう。しかしこのヒットイトの形の ha- は強階梯であることは, hanti の例からも明らかである。そこでこれだけを *H₂ester- とすると, ここでもまったく同じ語形成を

持つ形にちがった階梯を予想することになってしまう。つまり、最も拠り所とされたヒツタイト語の形が、逆に前置母音を H のあらわれとする理論構成に障害となる恐れがある⁽³⁾。

このように喉音理論は、Saussure のソナントの仮定においては整然とした理論の枠組におさまっていたが、ヒツタイト語の h との関係づけによって、さまざまな矛盾を抱くことになり、現在もその完全な解決をえられていない。というより、ヒツタイト語の文献学的な研究の進歩によって、逆にこの言葉の提供する資料のはっきりとした限界があたえられ、とかくこれを基準に理論構成にのみ走る傾向のあったこれまでの行きかたを改めて、この資料もひとつの対応として認め、いたずらに拡大解釈をしないという方向が打ち出されてきている。H はいまやかかつてのような再建の *Zauberstab* ではなくなったといわなければならない。

喉音理論をふくめて再建の理論に対する反省は、その理論の示す矛盾による以外に、別の面からも提出されている。祖語の再建は具体的な言語資料を基にして、帰納的におこなわれる。そしてそれらの再建形を総合して祖語の組織の理論構成を考え、その枠組みのなかで個々の形を検討し、変化の過程をたどろうとするのが、伝統的なこれまでの再建の方法であった。ところがこの帰納的な再建の結果に対して、別の立場から批判が寄せられ、訂正がもとめられるようになった。これは戦後の言語学の進歩に負うところが大きい。その最初のきっかけは、1957 年の 8 月に Oslo で開かれた第 8 回の国際言語学会議における R. Jakobson の類型論からみた比較文法の再建に対する批判である。そのひとつは、先にのべた喉音理論にみられる母音 e のみによる再建の傾向である。これは記述のように、最低でも 3 個の H の仮定と、これに同時に考慮されなければならない語幹形成母音 e/o の組み合わせにおける困難を回避するために、やむをえずとらざるをえなかった逃げ道のようなものであった。もちろん H との結合によって生ずる以外に、本来の母音として e 以外に a, o の存在を祖語に否定できないけれども、o は e との交替の裏にかくされ、a は対応する語彙の expressive な性格によって軽視された結果、とかく再建は e 階梯の形のみによるほうが無難であったために、このような Jakobson の批判が生まれたのである⁽⁴⁾。

Jakobson によれば、母音的な要素がひとつしかない言語は世界中に存在し

ないから、こうした再建の手続きには疑問があるという。しかしそれが絶対にありえないかという点、この会議の席で英国の W.S. Allen が、コーカサスの Abaza 語をその実例としてあげている通り、存在しないとはいきれない。これに似た問題は、祖語における k の 3 系列の音の仮定にも論じられている。この場合も 3 系列の区別をもった言語が世界に存在しないわけではないことは、同じく Allen の指摘する通りである⁽⁵⁾。ただ母音に e だけしかもたないという言語はあったとしても極めて珍しいことは事実だから、この批判によって、それまでの喉音理論からくる行き過ぎた再建が後退し、代わって再びかつての古典的な母音組織が復活した。この母音組織の問題と並んで、Jacobson は子音組織についても、その再建に疑問を投げかけた。それは多くの比較研究が、p, b, bh という 3 系列の破裂音の組織を祖語に仮定しているが、有声の帯気音 bh をもちながら無声の ph を持たないということは類型論的にみて異常であるという批判である。この無声帯気音の系列は、古典的な比較文法においては、その存在が数少ない対応によるとはいえ、認められていたから、祖語の破裂音は 4 系列であった。ところが、これも喉音理論により、さらにさかのぼれば Saussure の発言がヒントになって、その存在が否定されるようになった。というのは、彼が 1891 年 6 月 6 日のパリの言語学会でこの無声帯気音にふれ、Skr.pr̥thú-「広い」、pr̥thiví「大地」、あるいは Skr.sthā-「立つ」などの -th- は tH から二次的に生まれたものではないかと述べた (Recueil 603)。これはまた、Gr.lúkhnos「灯火」<*luksno- (Av.raoxšna-「明るい」、Lat.lūna「月」、OCS.luna <*louksno/a-), あるいは Skr.stutá-「讃えられた」に対するパーリ語の thuta- といった形をみても、うなずける推論であるから、この無声帯気音はたちまち祖語の音組織から消されてしまった。しかしこの批判に対しても、p, b, bh という 3 系列をもった言語が、アウストロネシア語族の Kelabit 語の Bario という方言に確認されているから、類型論が全能だとはいえないけれども、多くの研究者がこの批判以後は、古い 4 系列に逆もどりせざるをえなかった⁽⁶⁾。

Jacobson に始まった再建における類型論的な配慮の傾向がいつそう顕著にあらわれたのが、つぎにふれるグルジアの T.V. Gamkrelidze とロシアの V.V. Ivanov の提唱した子音組織に関する新しい解釈であろう⁽⁷⁾。これは従来の再建による祖語の p, b, bh という 3 系列の組織を疑問とするものではなく、むしろ 3 系列は認めながら、その内容を問題にする。というのは、印欧語の子

音の対応をみると、現実のどの言語でも *b* の頻度は非常に高いのにもかかわらず、確実な対応は極めて少ない。Skr.*bálam* 「力」、Gr.*beltfōn* 「よりよい」、Lat.*dēbilis* 「力なき」、OCS.*bolijǐ* 「より大きい」はその数少ない対応の一例だが、その他の多くは Gr.*bárbaros*, Lat.*barbarus* 「夷てき」のような、いわゆる expressive な性格の語に限られている。また Goth.*greipan*, OE.*grīpan*, Lith.*griebù* 「つかむ」のように、確実な対応がごく限られた語派にしか指摘できない例も多い。*b* という子音の分布の片寄りには、ギリシア語の語彙におけるそのあらわれをみても、ある程度うかがわれる。*baú* 「犬の吠える声」、*baúzō* 「吠える」、*bómbos* 「うなるようなにぶい音」、*bdéo* 「おならをする」(Lat.*pedō*, Russ.*bzdetī*) など。また Gr.*strabós* 「斜視の」、*skambós* 「がに股の」、*rhaibós* 「曲がった」、*hubós* 「せむしの」といった形の *-bos* をみると、これは身体の欠陥をあらわす語彙に共通している。つまり、これらの *b* をふくむ語彙は、比較的低い俗語層に属していたのではないかと推定される。そのために、限られた数の、しかも宗教、政治、文学といった高い層の言語に属する文献からえられた語彙の対応には、これが指摘できないのではないかと考えられる。またある言語において、ある音素の頻度が低いということは、そう珍しいことではない。日本語においても、古来唇音のそれは全体的に低かったといわれている⁽⁶⁾。

こうした事実は、対応によって帰納されたものだから、不自然だからといっても消すことはできないけれども、これを専ら言語の組織のなかの問題としてとらえ直そうとしたところに、先にあげた二人の旧ソヴィエト圏の研究者の狙いがある。彼らはこの *b* の対応の少ないということ、つぎのような類型論的な事実と結びつけようとする。それは、一般に破裂音の組織においてもっとも欠けやすく、その空き間になる可能性の高いのは、無声ならば *p*、有声ならば *g* という 2 つの音であるという事実である。例えば、ケルト語派は他の語派の *p* にゼロで対応する。Skr.*pitár-*, Gr.*patér*, Olr.*athir* 「父」。そこでこの *p* を、対応の少ない *b* と関係づけることはできないか。この仮定を満足させるために、ここにグルジア語のもつような声門化音 Glottalized *p'*、つまり放出音 ejective を予想しようというのである。同様に祖語の *d*, *g* にも、*t'*, *k'* を想定する。この仮定は、従来の再建が **ged-* のような 2 つの有声破裂音の語根を許さないという制約にも合致する。コーカサスの諸言語でも、2 つの異なる放出子音はひとつの語根に共存しないからである。これによって祖語に

bの対応が少ないことと、破裂音の組織の穴としてpを欠くことが多いという類型論的な帰結とを、ともに満足させる説明が可能になると著者たちは主張する。その他の2系列、つまり旧来の*pと*bhに対しては*p(h), b(h)を立て、帯気性はこの音素の関与的特徴ではないとしていたが、その後にはやはり aspirated allophones が basic だと考えているように思われる。そのほうが、各語派への変化は説明がしやすいからだろう。この新しい仮説において、*p(h), b(h)は従来の組織に大きな変化をもたらすものではない。なぜならば、これまでの*p, t, kに対して*p(h), t(h), k(h)であり、これまでの*bh, dh, ghに対して*p(h), d(h), g(h)だから、ゲルマン語のように*p > ph > fという音韻推移を*p(h)から直接導くだけで、その他の過程に変更の必要がないからである。ただ問題の*b, d, gに対する放出音の*p', t', k'の仮定は、記述のように*bの対応は少ないとはいえ、*d, gのそれは確立しているから、これとの音値はあまりにかけはなれているし、古代において放出音をもった印欧語の記録もないので、対応による支持のないこの仮定を簡単に認めることは難しい。また仮定される無声の*p', t', k'が無声のp, t, kではなくて、有声のb, d, gに変化したとしなければならないことも、この仮定に大きな疑問を投げかけている。また著者たちが主張する現代のアルメニア語におけるこの放出音の存在も、必ずしも確証がえられてはいない。

この二人の著者とは別に、同じように有声の破裂音に*p'を仮定すると同時に、従来の有声の帯気音*bhはlenisとfortisとの合体という不自然な音だから、その存在を否定して、これをmurmured stopに変えようという指摘もおこなわれた⁹⁾。このような放出音の仮定という、これまでにまったく予定されなかった音が祖語のなかに登場したことについては、戦前にTrubetzkoyが印欧語族の故郷にふれた研究にさかのぼることができる¹⁰⁾。彼はそれまでの対応にのみ頼る比較方法を疑問として、これに加えて類型論的な観点を考慮すべきだとして、いくつかの特徴を共有する他の語族との関係を論じ、それに基づいて祖語の位置を推定しようとしたが、その際にコーカサス諸語も考慮され、故郷もこれに近いところという可能性を示唆した。Gamkrelidze, IvanovはこのTrubetzkoyの説を踏襲して、故郷問題についてもコーカサスから南に小アジアにはいる地域一帯をこれに想定し、この放出音の仮定の裏づけにしている。

それでは祖語におけるこの新しい破裂音の組織の仮定が、比較文法にどのよ

うな貢献をしたのだろうか。旧説にまさるところはなにかという点を改めて考えてみると、確かにこの斬新な仮説によって *b の対応の僅少なことに對して類型論的に納得のいく説明はできたであろう。しかしこれによって下位諸言語への変化の過程がより無理なく進められる点は特に認められない。最近の Job の研究によると、新しい仮定における $p' > b$ という印欧語中の 9 語派がうけたと仮定しなければならない deglottalization と有声化という変化は、コーカサスの諸言語においても珍しく、それも無条件ではない。また一部の方言にこの音素をもつといわれるアルメニア語も、 $*p' > b$ の変化は再建によるもので、過去の歴史においてこれを実証するものではない。それではこれに対する従来の有声の破裂音 $*b > p$ といったゲルマン語の示す音韻推移における無声化の仮定が実例がないかということ、そうではない。これはスコットランドのゲール語とか、モン・クメール語に実証されるという。従って、伝統的に確かな $*p, b, bh$ というモデルは、記述のように共時的には実証が少ないが、その仮定から下位の諸言語への変化は十分に実証できる。これに對して新しい $*p (h), p', b (h)$ のモデルは、共時的には納得できるものだが、歴史的には十分に実証されない恨みがある。つまり、どちらのモデルを選択しても大差はなく、新しいそれにより大きな利点があるとはいえないことになる。参考までに、こうした批判に對して Gamkrelidze は、最近つぎのように述べている。従来のグリムの法則といわれてきた $*b, d, g > p, t, k$ の音変化の仮定と、自説の $p', t', k' > b, d, g$ のそれを比較して、"even such a simple sound-shift as voiced $>$ voiceless: $b, d, g > p, t, k$, which nobody doubts, cannot be clearly and unequivocally demonstrated on the evidence of historical languages, on the strength of their historically recorded material." つまり、この音韻推移を支えているのは、その規則的な対応しかないのではないか。それではもし逆に $*p, t, k$ が b, d, g に有声化したという仮定を立てたとしたら、この 2 つのどちらを選ぶかは "The choice in individual cases lies with typological and/or comparative evidence." このやや自己弁護ともとれる言葉を読むと、著者自身がこれは選択の問題であり、立場の違いであって、どちらかが絶対に有利とはいわれないことを認めているように思われる。これは、先の喉音理論の場合に似て、帰納的な再建ではなくて、あらかじめ想定された理論的な根拠から、対応をそれに合わせて解釈していこうとする方法が当面せざるをえない結論であったといえ

よう⁽¹¹⁾。

この Gamkrelidze-Ivanov の提案は、それ自体としては祖語の音組織を書き換えさせるほど強い説得力をもってはいないけれども、この新説をとれば、これまでのグリムの法則のような変化の仮定は不必要になる。つまり、ゲルマン語やアルメニア語のほうが、この点に限って言えば古風だということになる。こうした考え方と、ヒッタイト語の比較研究の進展が刺激となって、伝統的なサンスクリットやギリシア語重視の祖語に対する観念を改めようという機運がいっそうはっきりと打ち出されるようになった。また一方では、故郷問題に関係して、考古学者 M. Gimbutas が提唱したクルガン文化の段階的な波及説にあい呼応するようにして、祖語についても3段階の時間的、空間的な拡大を想定しようとする説が、M. Meid によって提唱され、最近の印欧語学会のテーマになるなど、注目をあつめている。彼によれば、祖語の時代に続く紀元前4千年代、それから3千年代から1千年代にはいるまでの3段階が想定され、この第2期にヒッタイトを中心とする後のアナトリア語派が故郷をはなれ、また古ヨーロッパ群とインド、イラン、ギリシアという東群との方言差がでてきて、やがて第3期に至って東群が分離したと推定される。従ってこれまで形態論の分野で祖語の再建にもっとも有力な拠り所となってきたサンスクリットとギリシア語に共通する複雑な屈折語の特徴は、むしろこの第3期の分裂以後の時代にこれらの語派が共通して発達させたものとみなされる⁽¹²⁾。

そこで例えば動詞を例にとれば、まず初めの段階においては、ヴェーダ語文法において *injunctive* と呼ばれている、本来は時制も法も伴わずに、単純に行為そのものをあらわす形が用いられていたとする。この事実は、リグ・ヴェーダの用例からある程度推測できる。それが次の段階になると、3 sg. **g^when-t* 「打つ」に現在の「いま」を示す指示的な接尾辞 *-i* が加えられ、**g^when-t-i* となり、いわゆる現在形が成立する。つまり、従来第一次の人称語尾とされてきたものが第二次の語尾をもとにして形成されたとみるわけである。それと同時に、古いこの *-i* をもたない形は過去の機能を担うことになる。そして東のインド、イランとギリシア語派（それにアルメニア語派）では、その過去の機能を明示するために、**e-* という加音 *augment* を接頭辞として加えるようになった。これが後の未完了 *imperfect* であり、持続をもたない行為であればアオリスト *aorist* になっていった。これに対して西のヨーロッパ群では加音

を用いなかったから、過去である未完了形はラテン語の *dīcēbam* のように新しい語形成を試みるか、アオリストを既存の完了形に吸収させていった。

加音のような要素は、これをもつのが南に位置する一連の語派に限られる上に、その用法も必ずしも一様でなく、規則的とはいえないから、方言的な現象だと考えるべきだろうが、アオリストとなると、いわゆる語根アオリスト、あるいは *s* をもつそれをみても、分布はかなり広く、これまでは祖語のものとしてされてきた。そこでゲルマン語とヒットイト語の両派がその痕跡を示さないとすると、この二つの語派には初めからこれがなかったのか、逆にいえば、これをもつ語派はそれを新たに共通してつくったのか、あるいはこの両派がそれを失ったのか、いくつかの可能性が考えられてくる。そこで例えば、つぎのような孤立した形の解釈は、このどちらの立場に立つかの選択によって違ってくる。ゲルマン語の強変化動詞の過去形の人称変化をみると、その語尾にふしぎな違いがある。Goth.*baíran* 「運ぶ」のそれは、sg.1 *bar*, 2 *bart*, 3 *bar*, pl.1 *bērum*, 2 *bēruth*, 3 *bērum* であり、北ゲルマン語でも変わらない。ところが西ゲルマン語では2人称単数に *-t* でなくて *-e*、または *-i* がみられる。OE.sg.1 *ber*, 2 *bære*, 3 *bær*, pl.1, 2, 3 *bæron*; OHG.sg.1 *bar*, 2 *bāri*, 3 *bar* pl.1 *bārum*, 2 *bārut*, 3 *bārun*。この2人称単数の語尾 *-t/-e, i* の違いは、ひとつの形に還元できないほどの差である。ゴート語と北ゲルマン語の *-t* は、この語派の強変化動詞の過去形は印欧語の完了形に比定されるところから、Skr.*cakārtha* 「つくった」、Gr.*oīstha* 「知っている」に示す sg.2 **-tha* にさかのぼると推定されている。これに対して古英語の *-e*、古高独語の *-i* は、Gr.*é-lipes* 「残した」というアオリストの2 sg. *-e (s)* に比較され、ひいてはこれがゲルマン語におけるアオリストの貴重な痕跡として認められるに至った。というのは、この2人称単数の形には、もうひとつ異常な点がある。それは *-æ, -ā-* という、複数形と同じ語根部の長母音である。これもゴート語や北ゲルマン語には見られない特徴で、実はこれが、ゴート語の *bindan, band, bundum* の母音交替に典型的にあらわれている弱階梯の代わりにあらわれる延長階梯 (Goth.*niman, nam, nēnum* の *nēnum* と同じ) ととらえられたところから、これが弱階梯のアオリスト形 Gr.*é-lip-es* に結び付けられるきっかけとなっている。それではなぜゲルマン語のなかで西方言の、しかも複数形ではなくて単数の2人称にのみ弱階梯が残っているのだろうか。この点の説明は難しい。本来ならば、この不規則な現象が説明されて、は

じめてそのアオリストとの関係が確実なものといえよう。もちろんこのような疑問があるところから、ゲルマン語のなかでの解決も提唱されている⁽¹³⁾。

この人称語尾の問題の説明は、音論でいえば、Arm.erku が Lat.duo 「2」の対応に加えらるかどうかを検討するのに似ている。はじめからこの関係を否定すれば、アルメニア語の参加はないが、もし対応するとしたらという前提に立って考えれば、対応は不可能ではなくなるし、音変化も一応は説明がつけられる⁽¹⁴⁾。これと同じように、先にみたゲルマン語の過去の不規則な人称語尾の解釈も、祖語にアオリストがなかったとしたら、当然違ったものになるだろう。長い伝統に従えば、サンスクリットとギリシア語の文法大系の著しい一致から、その一致が示すところのものがすべてに古いし、祖語の組織の反映であるという考えが支配してきた。動詞の時制ならば、現在、アオリスト、完了という3語幹の区別が祖語のものだとされてきた。それが先にふれたように、これらの複雑な動詞の組織は実はインド、イラン、ギリシアという東群の独自のものともみれば、ヒットイト語のような、実際にはひとつの語幹で現在と過去の2時制をもつ組織のほうが古いということになる (Hitt.kuenzi, pract. kuenta 「打つ」、aki, akta 「死ぬ」)。従ってゲルマン語の強変化動詞のもつ2語幹、2時制の組織も、より古風な形をとどめているとみることも誤ってはいないことになる⁽¹⁵⁾。しかしその場合に、我々は名詞の格と同様に、時制の融合の例はイタリック語派やスラヴ語派において知っているが、逆にそれが単純な組織から複雑化していく実例をもっていない。従ってその過程について、他の語族からのものでも、なんらかの具体的な説明がほしいところである。

この二つのうちのどちらを選ぶかの選択にあたって、より説得力のあるほうがよいにきまっているが、それを決めることはなかなか難しい。音論の分野ならば、対応によって祖語の形があたえられる。そしてその変化の結果としての文献に残る形も、はっきりと与えられている。従って始めと終わりがあるのだから、それを結ぶ線の間の過程をどう説明するかが問題となる。ところがそれが形態論の分野になると、事情は異なり、基点となる祖語の実体について、音対応から祖語の形を推定するようには、再建は思うようにはいかない。そこでまず問題となる事項について祖語の組織を、文献上の資料と理論的な解釈に基づいて推定し、それに合わせて各語派のあり方を説明するという方法がとられている。現在の代表的な印欧語学者といわれる Freiburg の Szemerényi に

も形態論における再建に関する論文があるが、とくに新しい方法は提起されていない⁽¹⁶⁾。つまり、形態論においては、音論とは違って、しばしば再建形がはっきりと明示できないから、当然これと現実の形との間の過程は、合理的な音変化のようにはいかず、多くの部分を推理に頼らざるえないことになる。

例えば、格についてみると、Skr. (dat.-abl.) *vṛkebhyaḥ*, と OCS. *vlikomī* 「狼」に代表される複数の与一奪格の語尾は、Skr.-*bhyaḥ*, Lat.-*bus*, OIr.-*ib*, (Gr.-*phi*; *sùn híppoisi kai óchesphi* 「馬と車で」 II.4.297) に対して、Goth.-*m*, OLith.-*mus*, OCS.-*mu* (Goth.*sunum*, Lith.*sūnūms*, OCS.*synūmū* 「息子」) だから、この違いは対応の割れである。そこでこれを祖語においてはひとつの形であったとみれば、*-bh- と *-m- のどちらかを基礎に、音変化によってこれらを結ぶことを考えなければならないだろう。これに対して、この両者は地域的な分布からみても別個のものともみれば、これは祖語における方言差のあらわれとみなされよう。どちらにより理があるかはその説明によるが、それも容易にきめられない場合には、選択は研究者の祖語に対する考え方にかかってくる。この分野で長く論議されてきた問題に、祖語における文法性は3か2かをめぐる論争がある。印欧語の多くの言語の歴史をみるかぎり、男女中の三性が区別されていて、それが二性に統合され、またはさらに進んで性のジャンルを失うという現象がみられる。ラテン語からロマンス語への過程は前者であり、英語は後者のよい例といえよう。現代のインド、アリア諸語をみると、古代インド語であるサンスクリットの三性をそのまま保持しているのは南に話されるマラティー、コンカニー、グジャラティー語だけで、北西部のベンガリーなどの諸語はみな男、女の二性に、東群はゼロになり、その中間の言語群はゼロに近づきつつある状態だという。つまり、印欧語の一般的な傾向としては、3-2-1 という差別の減少がはっきりと認められる⁽¹⁷⁾。

ところがこの場合にも、ヒットイト語の解説によって思わぬ事実が明らかにされた。というのは、この言語は二つの性、男と女を合わせた共通性とこれに対する中性という、いいかえれば、生物と無生物 *animate/inanimate* の二性の組織である。そこでこの組織は、これまでの歴史から考えれば、祖語に予想される三性が二性になったのだと解釈されよう。コーカサスの言語やアルメニア語というアナトリアに隣接する諸言語が、その証拠に性別をもたないから、ヒットイト語もこれと同じように、性別を失いつつある過程にあるとみなされた。しかしこれは言語外の要因で、説明としては十分とはいえない。そこで先

にゲルマン語におけるアオリストの有無の検討の例を参考にすれば、三性組織は新しい発達で、祖語においてはヒッタイト語のような生物、無生物の二性であったという推定も可能になる。この二つの説のどちらを撰ぶか、その基準はなにか、これは簡単に決めにくい問題である。三性組織は、文献の示す限りでは、まったく有力であり、その減少も実例に富むから、これを祖語に仮定することは無理ではない。しかし二性の組織が、ヒッタイト語というもっとも古い文献に実証されたところに、容易に否定しがたい魅力があったので、二性の支持が Meillet 以来絶えることなく続けられてきた。これはちょうど喉音理論におけるヒッタイト語の *h* がはたした役割に似ている。ただひとつの言語の証拠が、そのまま祖語に結びつけられ、その他の言語はこの仮定にそって解釈し直されるという結果になる。言語普遍の立場からはどうであれ、印欧祖語におけるこの選択はともに決定的なものではなく、推移の域をでないところに、結論をみない実状があるといえよう⁽¹⁸⁾。

さてヒッタイト語のような二性を仮定すると、これが三性の組織に変化することを説明しなければならない。それはいいかえれば、共通性が男と女に分裂することであり、さらには女性の形がどのようにして生まれたかの解決にかかってくるように思われる。これは簡単に考えれば、動物の牡雌のような自然性の意識から、男女の文法性の分裂が起こったということになるが、形の問題が残っている。ヒッタイト語の語彙のなかに、他の印欧語の **-yā/i-* 語幹の名詞との対応はみあたらないし、**-ā* 語幹のそれとの対応も極めてすくない。これは、この言語において想定される **o > a* の変化と、女性の **-aH* の *-H* の消失のためにこれも Hitt. *-a* になったと考えられるところから、もし祖語の **-aH* (*f*) が残っていたとしても、他の *-a* 語幹とまぎらわしくなってしまったとも推定されよう。従ってヒッタイト語の資料から、古い女性形があったともなかったとも、どちらにも考えられるのである⁽¹⁹⁾。

ところで対応の上から女性形の形をみると、その語尾は極めて特徴的で、その多くは **-ā*, *-yā*, *-ī*, *-ū* といった長母音で支持されている。しかしこのすべてが長母音であるということは、かえてその形成が新しく、また類推などの働いた可能性を示唆している。これは、男、女、中といった組織に支えられた名詞、形容詞などの語尾の一致がはっきりと意識されてきた段階で整えられたものではないかと考えられるからである。というのは、祖語においては、Skr. *duhitār-*, Gr. *thugátēr*, Goth. *daúhtar* 「娘」, Skr. *sváasar-*,

Lat.soror, Goth.swistar, OCS.sestra 「姉妹」, あるいは Skr.snuṣā, Gr.nuós, Lat.nurus (gen.-us), OHG.snur, Arm.nu, OCS.snūxa 「嫁」のような本来女性に関係する形の対応をみてもわかるように, 形それ自体には男女の区別なく, 同じ子音語幹が用いられていたと推定される。「嫁」の語彙にみられるインド, スラヴ語派の女性形は, かえて新しい類推形であることをうかがわせる。つまり, この段階では形そのものには文法のカテゴリーとしての女性はもちろん, 男性との対立もなかった。それではいつごろにそうした二性が形のうえで意識されるようになったのだろうか。これはひとつの推定に過ぎないが, やはり語幹形成母音の *-e/o-* を用いた規則的な格変化をもつ **-o* 語幹男性, 中性名詞, 形容詞の登場した後であろう。このいわゆる thematic のタイプは, ヒッタイト語には非常に少ない。これはまた, この言語に他の言語のもつ **-ā, -yā* という女性の名詞に対応する形が指摘されないという事実とも符号する。そこで問題となるのは, **-ā* というもっとも有力な女性形の語尾は, なにに由来するのか, またそれがどうして撰ばれたのかという疑問である⁽²⁰⁾。

そこで早くから注目すべき現象が指摘されている。それは, 男性の **-o* 語幹の名詞の複数形の主格に, 中性形のそれと同じ長い **-ā* が使われている形があるという事実である。例えば, Gr.kúklos 「輪」, pl.kúkloi/kúkla, Skr.cakrás, pl.cakrá; Gr.mērós, 「脚」 pl.mēroi/mēra; Lat.locus 「場所」, pl.loci/lica。この複数形の *-ā* をもつ形は個々のものの複数をあらわすのではなくて, 集合的な概念としての表現である。そしてまたこの中性の複数が主語に立つとき, その動詞は単数形をとるという不一致が, インド, ギリシア, ヒッタイト語の古い文献に共通して認められる。例えば, ヴェーダ語において, dhṛsnāve dhīyate dhānā 「勇気あるものには獲物が積まれる」(RV 1, 81, 3), あるいはヒッタイト語において, kuē 2 ALAM ...kitta 「どのような二つの像があるのか」(KUB XV 39 I 20)⁽²¹⁾。これは中性の複数 **-ā* が collective にとらえられる傾向が強かったことを示唆すると同時に, これとは別に同じ語尾をもつ名詞が単数で使われていたことをうかがわせる。それは Gr.neaniā(-s) 「若(者)」とか, Lat.scriba 「秘書」, OCS.sluga 「召使い」といった形にその名残をとどめている。またヒッタイト語にも, maninku- 「近い」に対する maninkuvahha- 「近隣」のような *-ah (>-a)* をもった抽象名詞がある。従来はこれが女性形の源であるとか, animate の

カテゴリーから女性形をつくる契機になったのだろうと考えられてきた。しかしこの転位は形の共通点だけだから、説明としては十分とはいえない。また Skr.varṣám「雨」、Hitt.varsa-（共通性）に対する Gr.érsē「露」という女性形の対応が、女性形の発生の痕跡だといえるだろうか。これらの例証をもってしても、なぜこの *-ā が女性形に転位したのかという疑問は解決されたとはいえない。このギリシア語の女性形は多くの -ā 名詞のひとつにすぎないからである。

代名詞の (m.n.) *so, tod に加えて *sā が登場して、女性として多くの女性形の基になったという説が Meille 以来支持されてきたが、これはヒットイト語を尊重するのならば事実と反する。この言語では、三人称の代名詞は男女の区別はなく、enclitic -as か、独立した kās,あるいは apās を使っているからである。そこでこの型の -ā 語幹のひな型となったのは、*g^wenā「女」(Skr.gnā-「女神」、jáni-, Gr.guné, OCS.žena, Goth.qina, OIr.ben) という名詞ではないだろうかという説が支持されるようになった。これは、この名詞がたまたま *-ā をもった「女」そのものをあらわす名詞であるところからなされた推定にすぎない。これが Lat.taurus/bōs「牡牛/雌牛」のような自然性の牡雌の差を個々の形のもつ語尾、とりわけ thematic タイプの *-o/-ā- で表現しようとする意識の原動力になったといえるだろうか。このように考えてくると、男女中の三性から二性への過程は、実例も多く、説明も容易である。これに対して生物と無生物いう二性の前者が男女に分裂して三性という文法のカテゴリーが成立したという過程には、なぜ *-ā, ひいては -yā/-ī が女性に撰ばれたのかという点の説明に困難がある。

ここで改めてヒットイト語の中性名詞をみると, suppal(a)-「家畜」、hardu-「曾孫」、hazgara(i)-「神殿に仕える女性」のような例外はあるが、一般に無生物をあらわしている。従ってこの点では、他の印欧語とは違っている。そこで、例えば pahhur「火」のような中性の名詞を行為者として主語にしたいときには、-ant- という接尾辞をつけて pahhuenant- という共通の名詞をつくり、これを主語に使うという手続きが必要になる。これはいわゆる能格現象として早くから注目されてきた、この言語の古風な特徴である。しかしこのように中性の名詞のほとんどが無生物に関係するということは、印欧語の文法性のあり方を捨てて、自然性に近づいているように思われる。これはその組織が壊れつつある過程において、自然性によって単純にそれが再編されたの

ではないかと解釈できないだろうか。

再建という手続きが下位の諸言語の形のより合理的な理解のためであるとすれば、この場合にはヒット語だけが示す二性の組織をいきなり祖語に結びつけて再建形とすることに問題があったといわなければならない。形態論においては祖語の再建形は、音論におけるほどはっきりとした形を与えることはできないから、二つの可能性がある場合には選択に迷うことがある。しかしそのときにも、拠り所としてはまず諸言語の示す証拠がどちらが有力であるかということと、仮定された祖語の状態から現実の組織へ、いかに無理なくその間の過程を説明できるか、またその実証の有無が考慮されるべきだろう。

このように Saussure 以後の印欧語研究を振り返ってみると、二つの点がかつての Junggrammatiker によってつくられたその組織を改める大きなきっかけをあたえてきたように思われる。そのひとつは、いうまでもなくヒット語の発見とその文献学的な成果である。これは戦後になって著しいものがあり、これによってそれまでの行き過ぎた理論構成はかえって改められ、今後はよりその資料に忠実な再建が望まれよう。もうひとつの点は、世界の言語のデータに基づく類型論的な観点を、再建にあたってどの程度まで考慮すべきかという問題である。これは対応を無視したものであってはならないし、またそれでは意味がない。これを対応による再建の手続きのなかにどのようにとりこんでいくかが、これからの課題ではないかと思う。

《注》

- (1) Meillet の死後にあいついで発表された、Kuryłowicz と Benveniste の語根理論はその代表的なものである。両者の祖語に仮定する語根形式は対称的なものであったが、とくに後者の提唱した CVC- という最少の形式にすべての語根を還元して、それに接尾辞の付加などによって様々な語根を展開していこうとする理論は、今日にいたるまで多くの支持をえている。これによって語源研究にも新しい局面が開けたことは事実だが、一方では機械的な分析の行き過ぎた面も否定できない。例えば、それまでに *nek- という語根を基礎に再建されていた対応 Skr.náśyati, 「消滅する」、Lat.necō 「殺す」、noceō 「害する」、Gr.nekrós 「死体」、néktar 「神の飲物(死を克服するもの)」、Toch.B naksentr, pl. 「吐責する」が、実は語頭の n- だけが *H₂en-k-/H₂n- ek- > nek- と展開する語根部に属していて、-ek- は接尾辞と解釈されることになる。その *H₂en-k- の対応は、Hitt.henkan 「死」、Welsh angen 「死」、さらに Gr. anágkē < an-agk-ē 「必然」などによって支えられる。こうした分析が、後述する喉音理論と結びれて、あらゆる形の解釈にあたって、いわば Zauberstab のように使われるようになったのである。これに対して Kuryłowicz の提唱した形式は、

筆者自身がその理論の行き詰まりを感じてか、あまり利用されなかった。しかし最近では R.D. Fulk: *The Origins of Indo-European Quantitative Ablaut*, Innsbruck 1986 が、Kuryłowicz 流の CVCV - 型の、大きな形式を基本とする理論構成をとっている。この二つの理論と、発表された当時の問題点については、高津春繁：印欧語母音変化の研究と Laryngeals の発見、言語研究 3, 1939, pp.53-76 に詳しい。

- (2) 現在ヒッタイト語の語源辞書を刊行中の J. Tischler によれば、この言語の語彙のなかで印欧語として語源が想定されるものは 420 語で、そのうちで喉音理論に有効と思われるものは 180 である。しかし対応として予想される位置に Hitt.h がみられる例は少ない。J. Tischler: *Heth.h und die Rekonstruktion des indogermanischen Phoneminventars, Lautgeschichte und Etymologie*, hrg. von M. Mayrhofer etc., Wiesbaden 1980, pp.495-522. 著者は祖語の長母音について、これまでの e+H の融合したもののほかに、それ自体が長い母音があったと推定している。これはヒッタイト語の h が e+H という Saussure の仮定に対して十分な証明にならないことが明らかになったからだろう。なお喉音理論については、拙論 最近の印欧語の schwa の解釈について、言語研究 45, 1964, pp.27-38; M. Mayrhofer: *Indogermanische Grammatik*, Bd. 1, Heidelberg 1986, p.121ff.; ib. *Nach hundert Jahren, Ferdinand de Saussures Frühwerk und seine Rezeption durch die heutige Indogermanistik*, Heidelberg 1981; W. Meid: *Methodische und erkenntnistheoretische Bemerkungen zur Laryngaltheorie, Die Laryngaltheorie und die Rekonstruktion des indogermanischen Laut- und Formensystems*, hrg. von A. Bammesberger, Heidelberg 1988, pp.333-53.
- (3) 前置母音をふくめた H と e/o との組み合わせについては、R.S.P. Beekes: *The Development of the Proto-Indo-European Laryngeals in Greek*. The Hague 1969, p.18ff.; F.O. Lindeman: *Einführung in die Laryngaltheorie*, Berlin 1970, p.35f.; ib. *Introduction to the 'laryngeal Theory'*, Oslo 1987, p.36f.; S.E. Kimball: *Analogy, Secondary Ablaut and *oH₂ in Common Greek*, *Die Laryngaltheorie*, hrg. von A. Bammesberger (注 2), pp. 241-56.
- (4) R. Jakobson: *Typological Studies and Their Contribution to Historical Comparative Linguistics, Proceedings of the 8th International Congress of Linguists*, Oslo 1958, pp.17-25. なお pp.25-35 に discussion がある。そこに後にふれる W.S. Allen の Abaza 語の指摘がある。Allen はさらにこの問題について *On One Vowel Systems*, *Lingua* 13, 1965, pp.111-24 において、コーカサス諸語の母音組織を論じている。これは O. Szemerényi: *Structuralism and Substratum—Indo-Europeans and Semites in the Ancient Near East*, *Lingua* 13, 1964, pp.1-29 における Jakobson と同じ主張に答えたものである。なお伝統的に祖語に仮定されてきた e, a, o という 3 母音組織は、類型論的にみると不自然で、一般にはサンスクリットのような i, a, u という体系が普通であるという。そこでこれを祖語に仮定して、従来の対応の示す e, a, o との接点を求めようとする研究も試みられた。R. Schmitt-Brandt: *Die Entwicklung des indogermanischen Vokalsystems*, Heidelberg 1967. その場合には *e, o という交替する母音を認めないから、当然のことながら語根

は $TeiT-$, $TeuT-$ ではなくて, $TiT-$, $TuT-$ という弱階梯を基本としなければならない。従って強階梯は二次的, 類推的に生じたものとみなされる。これは母音交替の組織そのものを否定することだから, 形態論の改革を伴う問題である。また *e, o は *i, u, または a からの変化から導かれるから, 帰納的な方法では簡単にこれに到達することはできない。そこでこの類型論的観点を考慮すると, *i, a, u を基礎としては従来の対応を説明できないので, *i, u をソナントから母音に移して, *i, e, a, o, u という 5 母音の体系を仮定するのがもっとも無難な策ということになる。この 5 母音組織は, もっとも安定性が高いからである。しかしその結果 i, u の子音的な機能をもった y, w は半母音という扱いをうけ, r, l, m, n は, その母音的な機能をもった r, l, m, n とともに, 流音, 鼻音の項にはいることになる。つまりこれは, 旧来のソナントという, Brugmann, Saussure 以来機能的に一括して扱われて, 母音交替の上で非常に重要な役割を果たしてきた一連の音を解体して, ばらばらに示すことになる。これは類型論と一般言語学的な要請には合致するけれども, 再建形の組織的な理解には有効とはいえないだろう。

- (5) この gutturales の再建は, いわゆる centum/satem という西と東の語派の対応で, k/s, k^w/k, k/k という 3 種類が指摘される。これは帰納的な結果だから, 動かすことはできない。しかしどちらの言語群も実際に対応にあらわれてくるものは, 西は k^w と k, 東は k と s の 2 系列である。その上に類型論的な考慮をすると, k の調音に関して 3 系列を区別しているということは異常であるとすれば, これを祖語としては 2 系列にしぼることが必要であり, より自然だということができる。そこでこの 3 系列のどれを撰ぶべきか。これは対応からきめられるものではなくて, さらに別個の立場からの選択にかかってくる。例えば, 現在のエスキモーの言語やケルト系のゲール語は, いずれも k と前よりの k̂ を区別しているという。これにならえば, まず祖語にこの 2 系列を仮定して, 西側は前よりの k̂ > k への depalatalization と k > k^w を, 東側はその k̂ の s への変化を予想すれば, 現実の対応に近づくことができる。もちろんその他の可能性として, k/k^w, あるいは前よりの k̂/k^w の選択もありうる。しかしこの場合に k の 3 系列はありえないかという, そうではない。Allen の説明によると, コーカサスの Abaza 語ではこれが許されているという。またサンスクリットやブラークリットの北西群にみられるように, s, s̄, ś の 3 系列の s の区別を示す言語も存在しているのだから, 祖語の k の 3 系列の古い伝統的な仮定もあながち否定できない。J. Kuryłowicz: *Phonologisches zum indogermanischen Gutturalproblem*. Donum Indogermanicum, Heidelberg 1971, pp.33-38 (k/k̂); H. Wagner: *The origin of the Celts in the lights of linguistic geography*, TPS 1969, pp.203-50 の p.212ff. (k/k̂); K. Shields Jr.: *A new Look at the centum/satem Isogloss*, KZ 95, 1981, pp.205-13 (k/k^w); J. Tischler: *Hundert Jahre kentum/satem Theorie*, IF 95, 1990, pp.63-98; W.S. Allen: *The PIE velar series*, TPS 1978, pp.87-110 の p.90f. Tischler によると (上にあげた論文 p.74f.), インドとイランの両語派の中間に位置して極めて古い特徴をもった Kafir 語群の Kaī 語は, 印欧祖語に予定される 3 系列の k をもっている。またコーカサスのみならず, 北米とアフリカの言語にも同様の事実がみられるという。従って 2 系列にどれをとるかというより, 3 か 2 のどちらを仮定するかが問題である。

- (6) 注2にあげた M. Mayrhofer: *Idg. Gr. 1*, p.93 A 14. ただし著者自身はこの無声帯気音の仮定には消極的である。なおこの音の仮定については、拙論 *インド・イラン語派と印欧語研究 京都産業大学言語研究所所報 8*, 1987, pp.5-27 の p.11ff.
- (7) T.V. Gamkrelidze-V.V. Ivanov: *Sprachtypologie und die Rekonstruktion der gemeindogermanischen Verschlüsse*, *Phonetica* 27, 1973, pp.150-56. ただしこの考え方の萌芽は、かつて H. Pedersen: *Die gemeindoeuropäischen und die vorindoeuropäischen Verschlusslaute*, Kopenhagen 1951, p.10ff. にみられる。これについては注6にあげた拙論 p.16ff. を参照。東欧のこの二人の著者、とくに Gamkrelidze はその後もこの新しい解釈について、繰り返し違った角度から自説を主張し補筆している。例えば、閉鎖音の大系を幅広く扱ったものとしては、*Language typology and language universals and their implication for the reconstruction of the Indo-European stop system*, Bono Homini Donum, ed. by Y.L. Arbeitman and A.R. Bomhard, Amsterdam 1981, pp.571-609.
- (8) *b については、W. Meid: *Das Problem von idg./b/*, Innsbruck 1989.
- (9) P.J. Hopper: *Glottalized and murmured occlusives in Indo-European*, *Glossa* 7, 1973, pp.141-66. 著者は Gamkrelidze-Ivanov の glottalized p' は認めながらも、これが b に変化することには問題があるとしている。これについては、同じ著者の *Indo-European Consonantism and the New Look*, *Orbis* 26, 1977, pp.57-72 の p.68f. また著者が従来 *bh について述べているように、Pokorny の印欧語の語源辞書にあげられている語根にあらわれる *p, b, bh の3系列の音の頻度をみると、713/259/348 で、その割合は 6:2:3 である。一般には marked のように思われる *bh が、その意味では *b にくらべて unmarked である (p.66)。にもかかわらずこの存在を否定しようとするのは、Jacobson の批判をうけた従来 *p, b, bh という組織は希にしかみられないことで、その結果どうしても *bh の系列を消去せざるをえなくなったわけである。従って、本来は *p+H という連続によって発生したにせよ、祖語に *ph という無声の帯気音を認めれば、こうした問題は解消することになる。J.E. Rasmussen: *On status of the aspirated tenues and the Indo-European phonation series*, *Acta Linguistica Hafniensia* 20, 1987, pp.81-109; G. Dunkel: *Typology versus Reconstruction*, Bono Homini Donum, ed. by Y.L. Arbeitman and A.R. Bomhard, Amsterdam 1981, pp.559-69. また Gamkrelidze たちのように無声の *p' を仮定せず、有声の glottalic d と帯気音 *dh (これらとともに lenis), それに plain *t (これは fortis) という3系列を祖語に仮定して、これが後に d, dh, t になったとする説もある。F. Kortland: *PIE Obstruents*, *IF* 83, 1978, pp.107-18; *ib.* *PIE Glottalic Stops, The Comparative Evidence*, *Folia Linguistica Hist.* 6, 1985, pp.183-201.
- (10) N. Trubetzkoy: *Gedanken über das Indogermanenproblem*, *Acta Linguistica* 1, 1939, pp.81-89.
- (11) M. Job: *Sound Change Typology and the 'Ejective Model'*, *The New Sound of Indo-European*, ed. by Th. Vennemann, Berlin 1989, pp.117-36.; Gamkrelidze の引用は: *Diachronic Typology and Reconstruction: The "Archaism" of Germanic and Armenian in Light of the Glottalic*

- Theory, Language Typology 1987, ed. by W.P. Lehmann, Amsterdam 1990, pp.57-65 の p.59.
- (12) W. Meid: Probleme der räumlichen und zeitlichen Gliederung des Indogermanischen, Flexion und Wortbildung, hrg. von H. Rix, Wiesbaden 1975, pp.204-19. なおこれに対する批判としては, B. Schlerath: Ist ein Raum/Zeit-Modell für eine rekonstruierte Sprache möglich?, KZ 95, 1981, pp.175-202. 対応からの形の再建は段階的には不可能であるから, 形態論の分野だけで祖語に段階を仮定することが許されるかということは問題である。また M. Gimbutas の考古学説については, 拙著 印欧語の故郷を探る, 岩波新書, 1993, p.100ff.
- (13) A. Meillet: Caractères généraux des langues germaniques, Paris 1930, p.143; H. Krahe: Germanische Sprachwissenschaft 2, Berlin 1967, p.103; K. Brunner: Altenglische Grammatik, 3. Auflage, Tübingen 1965, p.279; A. Austefjord: On the Oldest Type of Aorists in Indo-European, JIES 16, 1988, pp.23-32 の p.23f. によると, ゲルマン語におけるアオリストの痕跡の指摘は J.v. Fierlinger: Zum deutschen Conjugation, KZ 27, 1885, pp.430-41 によるものとされている。また A. Bammesberger: Der indogermanische Aorist und das germanische Präteritum, Languages and Cultures, Festschrift E. Polomé, ed. by M.A. Jazayery and W. Winter, Berlin 1988, pp.55-62 によると, この 2 sg. の -e, j について (過去形) 1 pl.-um: x = (現在形) 1. pl.-um: 2. sg. -iz という関係から, この x = -j という類推形が生まれたとする説 (G.. Bech), あるいは完了形の optative に由来するという説 (E. Polomé) があるが, アオリスト説にまさるほどの説得力に欠けている。Bammesberger は折衷案として, ゲルマン語にも語根アオリストの存在を認めた上で, この -i を *-yē-/-ī- という optative の弱階梯として, 2 sg.-i (z) から考えようとしている。
- (14) O. Szemerényi: On Reconstruction in Morphology, Linguistic and literary studies in honor of A.A. Hill, vol. 3, ed. by M.A. Jazayery, E.C. Polomé and W. Winter, The Hague 1973, pp.267-83 の p.269. ここでは Pisani 説として, *du > Arm. k, そして *o > Arm.u から, *dwo > Arm.ku が, *treyes 「3」にならって *kru となり, さらに metathesis と prothetic vowel によって erku となったとみている。この対応については, 橋本万太郎: 現代言語学 東京 1981, p.300f.
- (15) ヒットライト語をめぐる時制の問題については, 注 6 にあげた拙論の p.20f. を参照。ゲルマン語の組織をより古いとみる主張としては, E.C. Polomé: Creolization theory and linguistic prehistory, Festschrift O. Szemerényi, ed. by B. Brogyanyi, Amsterdam 1979, pp.679-90 の p.688f.; ib. Germanic as an archaic Indo-European Language, Festschrift K. Schneider, Amsterdam 1982, pp.51-59. ちなみに, 名詞の格組織にしても, ギリシア語やゲルマン語にみられるような文法的な格を基本として, あとは各語派での発達を考えると可能である。F.R. Adrados: Agglutination, suffixation or adoption?, IF 94 1989, pp.21-44; K. Shields Jr.: Comments about the o-stem genitive of Indo-European, KZ 104 1991, p.52-62.
- (16) 注 14 にあげた Szemerényi の論文。ここではより複雑な組織からの単純化の

- 過程が中心に論じられている。その意味では著者は伝統的な立場を守っている。
- (17) C.P. Masica: *The Indo-Aryan Languages*, Cambridge 1991, p.217ff.
- (18) 高津春繁: *印欧語比較文法*, 岩波全書 1954, p.197f.。ヒッタイト語を重視する立場は A. Meillet (*Essai de chronologie des langues indo-européennes*, BSL 32, 1931, p.1-28) に始まるが、最近では, K.H. Schmidt: *Zur Vorgeschichte des indogermanischen Genussystems*. Festschrift O. Szemerényi, pp.793-800; W.Meid: *Der Archaismus des Hethitischen*, Hethitisch und Indogermanisch, hrg. von E. Neu und W. Meid, Innsbruck 1979, pp.159-76 の p.165f.。これに対して伝統的な三性組織を支持して, Meillet は Indo-Hittite 説に毒されたとするヒッタイト学者もある。A. Kammenhuber: *Zum Modus Injunktiv und zum Drei-Genus-System im Ur-Indogermanischen* 'ca. 3000-2500 v. Chr., Festschrift W. Winter, Berlin 1985, pp.435-66.
- (19) W.P. Lehmann: *Theoretical bases of Indo-European linguistics*, London 1993, p.152f. によると, 文法性というものは基本的に congruence category であり, これは祖語の語順が OV から VO 変わっていったときに重要になり, 女性形の一致も Gr.guné「女」に代表されるような語彙から意識されたのではないかという。
- (20) ヒッタイト語における名詞の性, 印欧語の女性名詞の痕跡については, P.W. Brosman, Jr.: *The semantics of the Hittite gender system*, JIES 7, 1979, pp.227-36; ib. *The Origin of the PIE ā-stems*, JIES 9, 1981, pp.255-73; ib. *Development of the PIE feminine*, JIES 10, 1982, pp.253-72. この著者もふれているが, R.V. Miranda (*Indo-European gender: a semantic and syntactic change*, JIES 3, 1975, pp.199-215) によれば, インド・アリア語の一つであるコンカニー語において, 中性名詞であった *čedû*「子供」が「少女」にその意味を変化したことで, それまで中性の名詞について使われていた語尾と, それと同じ語尾をもつ三人称の代名詞までが, 女性に転用されるようになり, さらにまたその他の女性をあらず語彙に影響したという。これは確かにひとつの語彙が文法の大系の一部に変化をもたらした例には違いないが, この言語では女性形はすでに存在しているわけだから, 新しいこの文法性の発生を説明するものではない。C. Watkins は, *Die Vertretung der Laryngale in gewissen morphologischen Kategorien in den indogermanischen Sprachen Anatoliens* (*Flexion und Wortbildung*, hrg. von H. Rix, Wiesbaden 1975, pp.354-78) と題する論文のなかで, 中性複数形の **-aH* が抽象的, 集合的な女性形に転じたとする説を支持して, そのアナトリア諸語における痕跡をあげている (p.362ff.). そこでルウィ語の接尾辞 *-ahi* (t) - を, *-hi* (t) - とみる Friedrich, Otten, Laroche らの通説に反して, *-ah-i* (t) - と分析して, ここに **-aH-* がその *-h-* によって実証されるとしている (例 *annarumahi* (t) - 「強さ」, *hattulahi* (t) - 「健康」)。しかしヒッタイト語にみられる同じ *-ah* (h) *i-* をもった形は, *hatahis*「肝臓にみられる乾いた斑点」のように, 集合的な意味をもってはいない。著者はパラ語にも同じ接尾辞を指摘しているが, これはさらに文献学的な検証が必要であろう。先にあげた Brosman の論文にも, この Watkins の解釈については, ふれるところがない。またこの接尾辞が男性形に対する女性形をつくった転位については, Watkins は説明をさけ, そうした eine Diskussion der öffentlich emotionellen, nationalistischen und

sogar theologischen Frage des relativen Alters des *genus femininum* in den indogermanischen Sprachen は意識的に捨てることにすると断っている。ということは、古典ラテン語のアクセントが強弱か高低かをめぐると同じ様相を呈してきたことになる。後述する Hitt.-ant- の接尾辞については、E. Benveniste: *Les substantifs en -ant du hittite*, BSL 57, 1962, pp.44-51; E. Laroche: "un ergatif" en indo-européen d'Asie Mineure, BSL 57, 1962, pp.23-43; E. Neu: *Zum Alter der personifizierenden -ant-Bildung des Hethitischen*, KZ 102, 1989, pp.1-15.

- (21) J. Friedrich: *Hethitisches Elementarbuch* 1, 2. Auflage, Heidelberg 1960, p.118. なおこの印欧語の文法性的の問題について、まったく別個の立場からの解釈が A. Erhart によって提案されている。著者は、バントウ語にみられるような名詞のクラス分類を考慮して、祖語の名詞をまず生物、無生物のような基準で分けて、これにそれぞれ -s, -m, -y, -t, -r, -n, -H といった語尾を配し、さらにこれに可算、非独立、現在している、行動する、などの特徴を組み合わせる9クラスを仮定し、これが歴史時代に融合した結果、*semianimata*, *inanimata*, *animata* という3クラスになったとする。しかしなぜ -ã が女性形の基になったかという点については、やはり *g^wenã 「女」という名詞がもともになったとしている。A. Erhart: *Die indogermanische Nominalflexion und ihre Genese*, Innsbruck 1993, p.34ff., 90.